

理屈と実践

研修を長年続けていると、よくいわれることがあります。研修内容についてです。「実践はできて、理屈がわからないのでは役に立たない」、「理屈は立つが実践はまるでできない」、「現場で実践しないと、研修の意義がないね」などです。これらに共通していることは1つです。理屈と実践の両方がないと役には立たないということです。まあ欲張りといえば欲張りです。

理屈とは何でしょうか、これが両者の関係を解き明かすヒントになると思います。「理屈とは物事の筋道、道理のこと」です。理屈は論理、理論などを連想させます。「理屈っぽい」とか「理屈をこねる」、「理屈に合っている」はこの意味を反映しています。

理屈に相對する言葉として「実践」、「実際」、「現実」があります。なかでも「実践」には能動的な働きが含まれています。実践とは単に現実があるというだけでなく、人間が対象に働きかけることによって具体化し、何かを実現することなのです。実践を次のように定義しましょう。「原理、道筋を活用して、対象に働きかけ、あることを生み出すこと」。ですから、研修にはやり方の道理や理論を活用して実際に活用できることが期待されているのです。

実践から得るもの

一般に実践はやさしく、理屈は難しいと考えられがちです。これは考え方の相違で、理屈はやさしいが、実践は難しいという言い方もできます。実践をしやすくするのが理屈と考えれば、気が楽になります。もともと世の中には実践があって、それを「もっと良くしたい」、「どうすればたやすくできるのか」と問いかけたことで、理屈が生まれたのではないのでしょうか。生まれた理屈を説明しやすく整理すると、学問になります。

たとえば、有機農法は先祖代々農家で行われていた農法で、今日、注目されています。有機野菜は味が良く、野菜本来の栄養価もっています。有機農法では害虫や雑草を防ぐ農薬や化学肥料を使いません。この農法は土づくりを中心に行います。有機物を混ぜ、腐食や発酵をさせることで豊かな土をつくるのです。手間がかかり、リスクも大きく、安定した栽培方法という点で難しい方法といえましょう。「楽々、良いもの、安く、早く」という生産の原則からみると難ありです。

ある人が実践をとおして優れた有機農法の理論を確立したとしましょう。すると、先進的な農業者はこれを実践していきます。野菜で、米で、果実で、多彩な実践が行われます。この実践成果から理論の

見直しが行われます。PDCを回すことになります。このようにして、実践は理論を生み、理論は新しい実践を生み出すのです。理論と実践のやりとりが、新しい学問を拓くのです。

理論に基づく実践力

なぜ、研修では両者が必要なのでしょう。第1は、たしかに実践力の養成が求められているからです。確実に成果の上がる実践を身につけなければなりません。第2は、応用と工夫を行える人材を必要としているからです。新しい実践をしてほしいのです。そのためには単なる繰り返しではなく、理論に基づいたものとなることです。第3に、自ら動ける人材が欲しいからです。自分で考え、自分で行動する人材が求められています。指示待ち人材はいらないのです。第4は、次世代の理論を生み出す担い手として、人材育成をとらえているからです。既存の理論と実践を身につけるばかりでなく、理論と実践を結びつけてインタラクティブ（複数の事象を相互に関連づける）に考えるプロセスを体験させたいのです。これが次代への飛躍の鍵を握っていると考えるからです。

私たちは何気なく、「理論と実践」という言葉を使っていますが、その深層には大きな流れが隠されていたのです。